2016 年 5 月 15 日付　長野県民新聞「１期生の進路状況」

県下初・唯一の中等教育学校 松本秀峰

1期生の動向

平成22年に、本県初の中等教育学校として松本市埋橋に開校した『松本秀峰中等教育学校』（小坂共榮校長）。この春、その1期生が巣立った。「未来の日本や世界をリードする人材の育成」を目指し、6年間学んだ生徒たち。1期生の動向、そして中等教育学校の魅力と課題を聞いた。

「バラエティーに富んだ進路」

東大進学から独自の道まで 81人中34人は国公立大学へ

「バラエティーに富んだ進路」と、1期生の進路状況について小坂校長は切り出した。東京大学を筆頭とした超難関大学や高偏差値大学、医歯薬系から文系やスポーツ系に進んだ生徒もいる。「高校入試がなく、じっくりとキャリア教育に力を入れた結果」と、菱田智晴教頭は強調した。

具体的な進路を紹介すれば、卒業生は81人だが、東京大学に1人が合格したほか、名古屋大、お茶の水女子大、東京医科歯科大等の難関大学に多くの合格者を輩出。さらに、信州大学には12人が合格し、国公立大学には全部で34人が合格。母数81人に対する割合は42%に達する。このほか、早慶上理（早稲田・慶應・上智・東京理科大）に23人、MARCH（明治・青山学院・立教・中央・法政）には30人が合格した。

また、合格学部の状況を見れば、国公立の医歯薬学部には全部で4人が合格したほか、看護系、スポーツ系学部にも合格者を輩出。このほか、進学者もいれば、ダンスや音楽の道に進んだ生徒もいる。また、進学先を見ても、医歯薬系から文系やスポーツ系に進んだ生徒もいる。「高校入試がなく、じっくりとキャリア教育に力を入れた結果」と、菱田智晴教頭は強調した。

具体的な進路を紹介すれば、卒業生は81人だが、東京大学に1人が合格したほか、名古屋大、お茶の水女子大、東京医科歯科大等の難関大学に多くの合格者を輩出。さらに、信州大学には12人が合格し、国公立大学には全部で34人が合格。母数81人に対する割合は42%に達する。このほか、早慶上理（早稲田・慶應・上智・東京理科大）に23人、MARCH（明治・青山学院・立教・中央・法政）には30人が合格した。

また、合格学部の状況を見れば、国公立の医歯薬学部には全部で4人が合格したほか、看護系、スポーツ系学部にも合格者を輩出。このほか、鉄道マンを目指し交通短大に進んだ生徒や、アルバイト奏者を志しパラグアイに渡った生徒もいる。

頭に紹介した小坂校長の「バラエティーに富んだ進路」そのものである。

その要因として菱田教頭は同校ならではの、6年間通しての「英語教育」と「キャリア教育」を指摘した。

「英語教育」については、高校入試がないゆとりを英語の授業に充填。毎日、英語の授業を設定するとともに、1・2年次には特にオーラルを重視。また、4年次（高1）には海外研修として、イギリスのケンブリッジ大で2週間学ぶが、ここでは完全に英語漬けの生活となる。「大学入試では一般的に英語のウエイトは大きいものだが、この英語力が入試では大きく影響した」と菱田教頭は分析している。

また、6年間一貫教育では、英語に限らず、全教科で系統的な学習ができるもの。1・2年次で中学校の全課程を習得。3年次から高校への教育課程に移行し、5年次（高2）までに高校の全課程を修了。6年次（高3）には、志望大学を目指しての学習に没頭できる状況。「段階的な教育システムは進路にも好影響」と菱田教頭は語る。

6年間通した「キャリア教育」 2年生の段階で大学見学

将来考え進学した生徒

「バラエティーに富んだ進路」の背景として菱田教頭が指摘したもう1点が「キャリア教育」である。具体的には2年次に東大や東京理科大、ICU等に出掛ける。「大学の雰囲気を知るとともに、何を学んでいるのかも知る機会」と菱田教頭。高校生になってから大学見学に行くケースは多々あるが、中学2年の段階で出掛ける時の、生徒への影響は計り知れないものがあろう。

3年次は地元の企業で職場体験。4年次には前述のイギリス海外研修を

（次ページに続く）

実施するが、その時には、ロンドンで働く日本人とも対談。海外で働く楽しさ・厳しさも学ぶ。さらに4年次には、信州大学農学部や繊維学部を訪ね、授業を見るとともに、地域企業も訪問。そして5年次は再び大学訪問。筑波研究所で最先端の技術を学ぶんだ。

ユニークなのが保護者が講師を務めてのキャリア教育。1年生から5年生までを対象に、医師、会計士、公務員等々、様々な仕事をする保護者が生徒に対し、仕事の楽しさ厳しさ等を直接伝授。生徒への影響は大きい。

以前、信州大学で教鞭を執っていた小坂校長は「たとえば理学部に入ってきた学生の中にも、大学で何を学びたいのか、また、将来、どのような仕事をしたいのかが答えられない学生がいたことは事実」とし、「高校卒業までに、自分の将来をある程度語られることは必要」と指摘。それゆえ、松本秀峰で学び「将来展望を明確にして受験していく生徒は、頼もしい限り」と続けた。

6学年が同一の空間で生活 憧れる下級生、見本となる上級生

人間形成にも多大な影響

「将来展望を明確にしての進路実績」とともに、中等教育学校の利点として、もう1点菱田教頭が指摘したのが、「人間形成」である。つまり「13歳から18歳までの子どもが、同じ空間で生活する」ことの影響力である。

松本秀峰では、部活動も生徒会活動も全て6学年が一緒になり活動している。さらに、日常生活の全てにおいて、6学年が同じ空間で過ごすことでのメリットである。ちょっと想像してみれば、小学校卒業したての1年生からすれば、大学進学間近の6年生、言わば高

実際、前述の東京大学に進学した生徒は、文化人類学を学び、さらに出版系の仕事に就きたいと、文科三類に進学。将来目標が決まっていれば、受験勉強にも熱は入るのは当然のことだ。

3年というのは、完全に大人。そこでの影響力は計り知れないものがあろう。

実際、13歳の生徒に取り、18歳の6年生は憧れでもあり、見本となる。その結果、上級生は良き見本になろうと規範意識も高まる。また、一般的に中学時代は習慣を外し、生徒指導での課題が生じやすい時期でもあるが、「本校では目立った生徒指導はなかった」と菱田教頭は述懐。さらに、今回の進学実績から下級生は「自分も」という意識が確実に高まっているという。

このほか、教員への好影響も出現。6年間を見通した指導であるため、大学入試を意識した授業となり、教員の中には大学入試対策のオリジナルテキストを作成する者まで現れたという。

一方、高校入試がないことで、中高一貫教育ではいわゆる“中だるみ”を危惧する声が多いのも事実。この件に関し菱田教頭は「キャリア教育等で、2年次の進路指導をしっかりやることで、そのようなものはなかった」と指摘。さらに、課題を聞けば「思いつかない」と返答した。

将来をしっかり考えての進路、そして人間形成にも大きな影響を与える中等教育学校。「人間性豊かで、未来の日本や世界をリードする人材を、今後もしっかり育成していく」と小坂校長は語ってくれた。

写真は上から、「6学年一緒の新入生歓迎会」、「部活動も全学年が一緒に活動」、「ケンブリッジ大学での研修」